

氏名	長 畠 駿 一 郎
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 授 与 番 号	乙 第 991 号
学 位 授 与 の 日 付	昭和53年 9 月 30 日
学 位 授 与 の 要 件	博士の学位論文提出者 (学位規則第 5 条第 2 項該当)
学 位 論 文 題 目	未完成歯再植に関する実験的研究
論 文 審 査 委 員	教授 小倉義郎 教授 大内 弘 教授 折田薫三

### 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

発育途上の歯が何らかの外力により脱臼あるいは脱落したり、正常な位置に萌出しない場合、審美的、機能的改善を計る一方法として歯の再植術がある。

著者は、一旦栄養をたたれた歯髓および歯根膜周囲の血管がどのように再生され、機能を営むかを検索する目的で、幼犬を用い、未完成歯再植後の治癒過程に関する実験的研究、とくにクロロパーチャ血管注入法で血管像の変化を形態的、立体的に観察し、さらにX線学的、病理組織学的にも検討し、以下の結果を得た。

- 1) X線所見では、再植後 10 日目頃まで歯根膜腔の病的異常拡大がみられたが、20 日目には歯槽骨側より骨の新生がおこり、30 日目には歯槽硬線が出現、90 日目では正常像と同様の所見となった。
- 2) 再植歯髓への新生血管は、20 日目頃までは増加し吻合や蛇行も多かったが、新血行路完成後は、血管数の減少とともに血管の走行も整然となり、その後血管は細く疎となり、歯髓内に骨様硬組織が新生し、歯髓腔は狭窄されていた。
- 3) 完成歯再植の場合にみられる骨性癒着、歯根の吸収は認められなかった。
- 4) 再植歯の運命には歯髓および歯根膜が重要な役割を果たしていた。
- 5) X線所見、血管像の変化、病理組織学的所見において、ある程度の相関関係が認められた。

### 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は歯科移植学領域における未完成歯再植術について実験的に研究したものであるが、未完成歯再植後の治癒過程を血管の新生像の面から解明し、将来の臨床的应用にも重要な知見を得たものとして価値ある業績と認める。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。